

言語環境をユニバーサルにする授業づくり

—— 道徳の授業における実践 ——

前在日本国大使館付属ジャカルタ日本人学校 教諭

福岡県久留米市立江南中学校 教諭 金子 尋紀

キーワード：インドネシア、道徳、日本語支援、非言語的表現

1. はじめに

平成27年度から29年度まで、インドネシアのジャカルタ日本人学校で勤務した。小中学部の児童生徒を合わせると1000人を超える大規模校である。私は、1年目は中3担任、2～3年目は中学部教務主任を務めた。3年間の教育実践を通して、数え切れないほどの多くのことを学んだが、その中の一つを報告したい。

担当教科である社会科の授業をしていると、子どもたちから次のような質問が飛んでくることがあった。「田んぼと畑の違いって何ですか?」「インターチェンジって何ですか?」…日本での生活経験がない子どもも多い日本人学校の中で、日本そのものに対する子どもたちの理解不足を痛感する。そしてそれは、日本語の理解不足とはほぼ連動する。「垣根」という漢字を書けない子どもがいたが、それは「垣根」という文字を知らないだけでなく、「垣根」そのものを知らないのである（インドネシアには垣根をめぐらした家はほぼない）。そのような子どもたちの現状を前にして、道徳の授業で実践を試みた。

2. 子どもたちの実態

ジャカルタ日本人学校には、「国際家庭」（保護者のいずれかが日本国籍以外または日本出身ではない）で生活している子どもが多く在籍している。その内訳は以下のとおりである（平成30年2月23日現在）。

ジャカルタ日本人学校における国際家庭の状況

	在籍数	国際家庭（インドネシア）	国際家庭（インドネシア以外）
小学部	866人	94人	24人
中学部	232人	44人	4人
合計	1098人	138人	28人
比率	100%	約13%	約3%
		約15%	

それぞれ、家庭で使う言語は日本語、インドネシア語、英語などさまざまである。学校ではほぼ日本語で生活しているが、2つの言語のはざままで学習内容に関する理解が遅れる子どもも多い。

また、国際家庭でなくても、日本を長く離れている子どもも多い。テレビや新聞などの情報源も限られ、親戚づきあいや近所づきあいなどの日本語によるコミュニティも小さくなる中で、日本語の習得が遅れる子どもも少なからずいる。

ジャカルタ日本人学校では、国際家庭の子どものうち、希望者を対象として「日本語教室」を行っている。週1回程度、学年別に行っているが、平成29～30年度にかけては、日本語教室に通っている中学生はいなかった。実際には小学部1～3年生が多い。中学生は、日本語での日常会話に困る子どもは少ないが、漢字の習得や各教科の専門用語の理解が遅れる子どもがおり、全体的に国際家庭の子どもの学力は低い傾向にある。

3. 道徳の授業における実践

(1) なぜ道徳の授業か

道徳の授業は、新たに獲得する知識があるわけではない。自分自身の内なる道徳的価値に気づき、自分自身を振り返る時間である。そのような道徳の時間の学習は、資料の内容さえ理解できれば、主人公の心情に迫ることは言語に関係なくできるはずである。また、他者との交流活動においても、専門用語が必要とされる各教科の学習に比べ、易しい日本語でできるものである。授業者としては、まず道徳の授業において子どもたちの言語力を補う手だてを構築し、それから教科の授業への転移を目指したいと考え、道徳の授業における実践を試みた。

(2) 実践Ⅰ；資料の開発 ～絵本資料の提示～

中学2年生の授業において、絵本の資料を用いた。絵本はその名のとおりに、絵を中心に構成されており、言葉も幼児向けに平易な言葉で表現されている。テーマは深いものであっても、話の内容を理解するのは簡単である。また、言葉が少なく、主人公の心情について直接的に表現された部分はほとんどなく、読み手（生徒）が道徳的価値について考える余地が残されており、道徳の授業に適したものである。



資料提示（読み聞かせ）の様子

本実践で用いた絵本は『おまえうまそうだな』（宮西達也著）である。資料は読み聞かせにより提示した。読み聞かせは読み手が絵本の世界に入り込まなければ聞き手も世界に入れない。本気になって「ガオ〜！」と叫び、緩急つけて読み終えると、子どもたちから拍手が起こった。その後、印象に残った場面を発問し、いくつかの場面に共通する主人公の心情を問う中心発問を行った。話の内容自体は簡単なもので、全員が理解できたうえで考えたり交流したりすることができた。道徳的価値についても、本実践では「思いやり」をねらいとしていたが、子どもたちの中から「愛」というもっと深い価値が出され、それをまとめとした。

ちなみに、私が中学生に対して行った他の絵本による道徳授業実践は、『いのちをいただく』『100万かい生きたねこ』『おおきな木』『ないた赤おに』などがある。いずれも名作で、道徳の授業資料としても子どもたちを引きつけるものばかりであった。

(3) 実践Ⅱ；資料提示の工夫 ～寸劇による資料提示～

実践Ⅰと同じく、中学2年生を対象として行った。資料は『2分の遅れ』という実際のできごとに関する新聞記事をもとにしたものである。岡山大学での卒業論文の締め切りに2分遅れて提出した学生の卒業を認めるかどうか、という二律背反型の資料である。新聞記事の文章は大人向けの言葉であり、子どもたちにとっては話の状況もつかみにくいものである。また、事実を細かく伝えれば伝えるほど、授業で必要とする価値以外の視点が入っており、授業のねらいと違う方向に子どもたちの思考が向いてしまう危険性もある。そこで、本実践においては、教師による寸劇を行って資料を提示することとした。資料をもとにしてシナリオを作り、学年教師集団で役割を割り振り、当日は導入の時間に寸劇を披露した。もちろん、シナリオはこの授業で必要とされる論点のみに絞った。子どもたちは楽しみながら寸劇を鑑賞し、話の流れをしっかりと理解することができたようであった。



寸劇による資料提示の様子

寸劇の後は、資料の話に出てくるできごとの続きとして、「教授会」（学生の処分に関する会議）を子どもたちが模擬体験する形で討論した。討論の前提となる事実関係について全員が共有できていたので、議論が深まり、

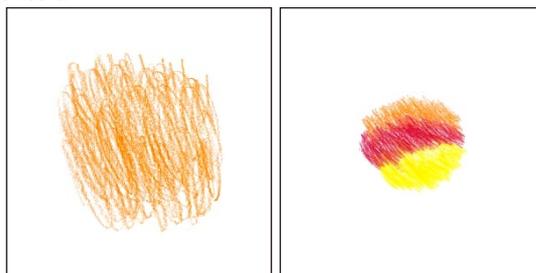
一定の結論を出すことこそできなかったものの、その討論の中に見える価値を焦点化することはできた。

(4) 実践Ⅲ；表現活動の非言語化 ～心情図や表情図による表現活動～

中学1年生を対象として行った。資料は『手品師』である。資料そのものが小学校向けのものであることも一つの手だてとして考えられるが、本実践では表現活動を非言語化することを試みた。道徳の授業で子どもたちが考えた内容は言葉や文章として表現させる場合が多い。評価のためには、最終的には言葉や文章で表現させるべきであろうが、いきなり言葉で書こうとしてもなかなか難しいのが「心情」というものである。言葉にならない思いや葛藤もある。言語理解が遅れている子どもにとってはなおさらであろう。

そこで、子どもたちが考えた主人公の心情を心情図や表情図で表現させてみることにした。

本実践は複数学級で行った。心情図で表す活動を行った学級では、主人公の晴れやかな気持ちと後悔の念を両方表す描画が多かった。そうすると全体で交流していても両方の心情に注目せざるを得なくなり、授業のねらいに迫るのが難しかった。そこで、他の学級では表情図で表す活動を行った。表情図では、晴れやかな気持ちのみを表している子どもが多く、授業のねらいとする価値に焦点化することができた。



子どもが描いた心情図



子どもが描いた表情図

4. 成果と課題

(1) 成果

- 絵本による資料提示により、子どもたちは資料の内容をしっかりと理解することができた。
- 寸劇による資料提示は、演じる者の動作も視覚的にとらえることができ、資料の内容を理解するためには大変有効である。
- 心情図や表情図は、文章による記述に比べて、描けない（表現できない）子どもがいない。複雑な心情も文章化せずに表現できるので、言語に関する理解が遅れている子どもも含め、全員が何かしらの表現をすることができる。
- 日本語の理解が難しい子どもを対象とした実践であったが、そのことがすべての子どもにとって活動しやすくなったり、共感が深まったりするという姿が見られた。



学級集団での交流活動の様子

(2) 課題

- 絵本ばかりではマンネリ化してしまうので、映像資料など、さらに多様な資料開発が求められる。
- 寸劇は演じる人数をそろえる必要があり、少人数では対応できないなど、実施するための条件に課題がある。資料に応じて適切な提示方法を判断する必要がある。
- 心情図と表情図など、用いる手だてによって子どもたちが気づく価値が違う場合がある。子どもたちの反応をしっかりと想定し、手だてを的確に判断したい。

- この実践が他の教科や日本の学校での実践にどのように生かされるのか、まずは自分の担当教科である社会科において実践を行っていく必要がある。

5. おわりに

ジャカルタ日本人学校に赴任して間もないころのことである。担任をしていた中学3年生の学級で道徳の授業をしていた。以前から表現活動に何かしらの工夫を取り入れることに力を入れていた私は、その授業における主人公の心情を「漢字一文字」で表す活動を試みた。そして、全員にその一文字を板書させた。すると、ある国際家庭の男の子がまったく見当はずれの漢字を書き、その意味を発表する場面でしどろもどろになり、ついに彼は黒板の一文字を消してしまった。語彙が少なかった彼にとってはきつい場面だったようだった。もっとわかりやすく、もっと表現しやすく、という取り組みの必要性を痛感し、子ども目線に立っていなかったことを反省した。どんな状況にある子どもにも、わかりやすく、そして思うがままに表現活動を楽しむことができる、そんな授業を求めていきたい。子どもたち一人ひとりが輝く授業を追究し続けていきたいと思う。

そのような考えに至ったジャカルタ日本人学校の日々は、教師としての姿勢を見直す機会となった。1～2年目にご指導いただいた齋藤稔校長先生、3年目に公私ともにお世話になった米村博司校長先生をはじめ、日本全国から集まった素晴らしい同僚と現地スタッフに感謝したい。そして、日本中から、世界中から集まったジャカルタ日本人学校のキラキラ輝く子どもたちに感謝したい。

Terima kasih! (テリマカシ!)